

いう。本書は畑作村落を中心のスケールとして、下位に家・家族のスケール、上位に人口・地域のスケールを置き、地域変遷を究明しようとする。畑作村落は研究の原点としての商業民をふくむ焼畑村を実態調査していく。

柳田国男の研究は水田中心史観の上にあった。喜多村俊夫・菊地利夫もそうである。

一方、畑作中心史は網野善彦・佐々木高明・上野福男・藤田佳久・小野武夫・古島敏雄等であろう。網野善彦といえば「百姓＝農民ではない」がよく知られている。様々な職業の総称「百姓」を「(水田) 農民」とくくってしまうことで、日本人の多様性が消えてしまった。そのくびきをとき、多様性を取り戻そうとした。本書の基本視点の1つには「網野史学」が活きている。佐々木の研究は焼畑から始め水田へと進められた。有蘭正一郎は稲作、畑作を問わず近世農書を渉猟し、耕作と土地利用の地域比較を行った。

地域史を押さえる主なる史料は、人口は江戸期は宗門人別改帳、明治期は戸籍を使っている。土地は同様、検地帳と土地台帳である。

評者が、近世期の労働力の地域性を扱っているという点で、内容的に最も優れていると考える箇所は凡そ次の①～③である。

① 1部6章、165～201頁である。一般に筆者もそうだが、畑作村落研究は内容的に焼畑等の土地利用の変化をみていく。一方で筆者は事例研究の蓄積が少ないなかその労働力を究明している。筆者は宗門改帳等を駆使して百姓の移動、奉公人(本書では宗門改帳が定義する下人、一年季以上の奉公人をいう)移動の空間を究明し、従来この分野の主流であった速水融等の歴史人口学視点に空間地域構造視角を導入し、この分野の嚆矢となって

いる。その空間の地図化としての図6-1～5等にその苦心、努力の跡がみられる。

② 筆者は、甲州西野村(50頁)で宗門改帳を使った従属百姓の独立について究明し、中・西北部の村(187頁、表6-8)等において、上層百姓経営とこれを担う17世紀にみられた譜代下人の衰退、これに代わった18世紀、奉公人労働力を明らかにしている。

門屋、譜代下人等の従属百姓が宗門改帳の記録として18世紀前半まで多量に存在していたが、畿内先進地の村落では彼らの独立はすでに17世紀中期にみられ、後進地の村落では幕末にいたるといふ。ここ甲州や信州では17世紀末から18世紀前半に本百姓層が多数創出されてくる(61頁)。

宝永2年(1705)を境に西野村では複合家族から直系の大家族形態へ、抱屋を中心とする従属百姓が独立して新規本百姓に取り上げられてくる。村の戸数が一挙に150戸も増えてくる時期がある(58頁)。

③ 筆者は、農間余業について、3章甲州桃園村(表3-3)で、7章早川流域焼畑村でも村明細帳による林業・金山労働等を究明している。同様に、7章で新倉村について百姓経営収支(251頁、表7-14)を扱うのは非常に興味をわかせる所である。

史料の価値もしかりだが、史料分析力には敬意を表したい。分析が深くすぐれているのは表1-4・5・6・7(しかし、説明は1-4・6のみ)、表2-4(検地帳と宗門改帳をつかう)、表4-3～6(「源吉日記」をつかう)、表6-2～3(宗門改帳をつかう)、表7-6～7・9(寛文検地帳をつかう)、図8-1・6(焼畑の分布図)、表8-6～10(土地利用と土地所有をみる)、4(「源吉日記」全文をあげる)・9(屋久

島栗生村の世帯構成をみる)章付表等である。

若干の疑問が残る箇所をみてみたい。集落調査が行われているのは中部地方中心の4村だけである。しかし、これは史料の量と質如何の問題である。

評者は本書に構成上の疑問を感じる点がある。それは11ヶの各章ごとに「はじめに」と「小結」が設定され、また「序章」と「終章」がある。論文としては各章が1つ1つ完結してはいる。しかし、評者は序章において、次の①～③を考慮して展開すれば本書がより洗練されてくると考える。①序章で、「焼畑」を切り口として畑作村を研究しなければならない理由は何なのか。第2部にて焼畑村を分析するのだが…。②例えば、50頁からの従属百姓の独立過程のなかの「従属百姓」、122頁～の明治20から22年の篤農家、中込「源吉日記」という「生活記録」、166頁からの「奉公人研究」と「宗門改帳」、231頁からの焼畑生

活と農間余業、のなかの「農間余業」、302頁・312頁の「名寄帳」、等のキーワードやパスワードを序章に持ってきて各キーワードとその関連性を展開すること。評者は史料の存在が偏在し史料分析の手腕が問われるなか、統一的な切り口にて記述する困難さはあるにしてもが、その必要性を感じる。③結果として終章が5頁と短くなっている。これは構成上の問題から生じている。

なお、すでに有菌は近世農書の営農技術を指標にした地域分析を行い、土地利用や景観の視点から本書の書評³⁾を試みている。

(松田松男 記)

注

- 1) 松田松男『戦後日本における酒造出稼ぎの変貌』、古今書院、1999、316頁。
- 2) 井上定幸「近世期農村奉公人の展開過程」、歴史評論95号、1958、13頁。
- 3) 有菌正一郎、本書書評、歴史地理学 No 213、2003、62～64頁。